

R&V

16号

1995年

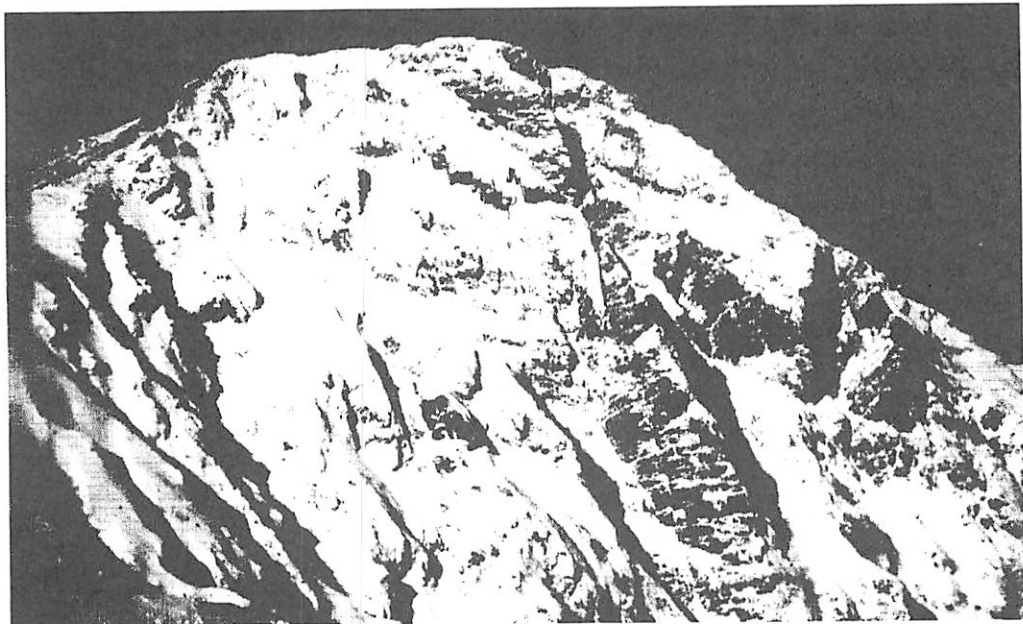
冬号1月～3月



Tchiodama

R & V

16号



《 photo by motozu 》

北岳バットレス

95' 冬 ACC-J 茨城

ある山岳会の解散

3月末、一通の手紙を受け取った。差出人は、当クラブでも会報交換させて戴いていた遡行クラブ神奈川の代表、菅沼弘子さんである。彼女は神奈川に沢登りクラブを作りたいという思いから相模労山を離れ、93年9月このクラブを作った。彼女にとって遡行クラブ神奈川は分身の様なものであったに違いない。会を盛り上げるため一人でも多く会員を増やそうと努力し、意欲的に山行を重ねてきたことは会報（峻嶺）からも良く読み取れる。現在の彼女の心境は、いかばかりか察するに忍びない。遡行クラブ神奈川では93年11月から94年11月までに会報を7刊発行している。今これらを読み返してみると、創刊号では会の基本方針として、沢登り専門の会にしたい。地域研究のできるような会にしたいと抱負を述べている。創立会員は35歳から46歳までの5名で、全員労山出身であった。5号では新人も2人入り、順調に運営されていると感じていた。しかし、7号では2名の退会者がでている。その内1名は創立会員で、退会理由は沢は好きではないからという。自分達で沢の会を作っておきながら沢が好きではないとは“なんじゃこいつは”と言いたくなる。もう1人は小さな会では要求がみだされないと理由からである。その後解散に

友好団体

会友 友人 各位

おれとおわび

水温む季節がやって参りました。皆様方におかれましては淡の季節を持ちわびて夢を膨らませたり、陽光を浴びて雪山を清喫したり、とご活躍のことと思います。

さて、突然ではありますが残念な報告をしなければなりません・・・当会は山岳会としての活動を継続していくことが非常に困難となり、今後の展望も見いだすことができず解散することになりました。神奈川に沢愛好者の会が欲しい、との熱き思いから1993年9月、丹沢の山荘にて多くの仲間や友人に励まされ設立されたことが昨日のこのように思い出されます。小さな会ながら、多少は沢の会としての活動ができたものと自負しております。しかし、組織活動の未熟さ、会員個々の事情等により、たった1年半で挫折してしまいました。

この間、多くの方々と出会い、学ばせていただきました。友好的なおつきあいをさせていただいたり、励ましをいただいたり、感謝しております。何のお返しもできないが、こんな結果になってしまつて申し訳なく思っております。

古い経験でしたがもう少し時間が経てば、これも思い出になる、と自分自身に言い聞かせております。今回の教訓をふまえ、いつかは再建・・・の願いを抱きつつ精進していくつもりです。

短い期間でしたが、ほんとうにありがとうございました。

最後に皆様方の健康と登山の安全を祈念しつつ、山で折で集会でお目にかかれるのを楽しみにしております。

1995年3月
遡行クラブ神奈川

代表 菅沼弘子

至るまでの経過は、はっきりわからないが、想像するにはこの退会がきっかけになったのではないだろうか。手紙の原文を載せたので読んで戴きたい。これを読んで当クラブ員なら他のクラブの出来事と笑う奴はいないであろう。当会もいつこのような事態になってもおかしくはない。現実には当会の母体であるACC-J東京も解散の危機にさらされているではないか。当会は昭和48年3人で発足した。何年、3人のクラブが続いただろうか。山に登ることではなく、会の運営にこんな大変な思いをするなら、いっそ解散したほうがいい、と考えたこともしばしばあった。でも少しずつではあるが会員は増えていき、ヒマラヤ遠征も実現できた。どこの会もそういう辛い時期があるものだ。現在の我クラブも再びそういう時期なのであろう。会員数は増えたが実動会員は最盛期より少なくなっている。総合デパートではない専門店のような小さな山岳会には氷河期であるのかもしれない。遡行クラブ神奈川の退会者の1人の理由“小さな会では要求が満たされないから”には私の胸にもグサツときた。当会でも山に行きたくてもパートナーがいなくて行けないことがあるではないか。やはり会員数はある程度多くいたほうがいい。我々はこの氷河期を乗り切らなければならないのだ。

菅沼女史も気を取り直し、一日も早く遡行クラブ神奈川を再建され、山で里で、あの清々しい顔を拝見できる日をお待ちしてます。

(本図一統)



《目次》

1995年 冬号1月～3月第16号 ACC-J茨城

ある山岳会の解散	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
95' 北岳冬合宿 in ボーコンハイツ	・・・	6
心象の山・白峰三山	・・・	14
豪雪の五竜岳	・・・	16
八ヶ岳・権現東稜	・・・	18
阿弥陀岳北稜	・・・	20
都岳連アイスクライミング講習会	・・・	23
赤岳主稜	・・・	26
越後・金城山北尾根	・・・	27
友好山岳団体の月報・会報紹介	・・・	32
編集後記	・・・	33

表紙絵…ナンガ・パルバット…(8125メートル)

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

【 1 月】

1月11日

出席者 本図、鯉河、笹沢、菊池、佐藤、古山、高須、生井、今井

1月25日

出席者 本図、高須、菊池、古山、告、佐藤、澤田、

【 2 月】

2月 8日

出席者 本図、古山、菊池、笹沢、高須、告

2月22日

出席者 本図、高須、古山、生井、今井

【 3 月】

3月 8日

出席者 古山、本図、高須、佐藤、生井、今井、告、菊池

3月22日

出席者 本図、菊池、鯉河、古山、笹沢、中居、生井、高須

山行報告

1995年 1月～3月

【 1月】

- | | | |
|------------|----------|---|
| 12月30～1月3日 | 北岳冬期合宿 | L 本図、高須、古山、生井、馬淵
澤田、佐藤、中居、坂本、告
今井、他4名 |
| 1月4～6日 | 五竜岳 | |
| 1月15～16日 | ハツ岳・権現東稜 | L 本図、佐藤、高須 |

【 2月】

- | | | |
|----------|-----------------|------------|
| 2月 4日 | 岳連冬期講習会 | L 高須、澤田、告 |
| 2月11日 | 阿弥陀岳北稜 | L 本図、笹沢、高須 |
| 2月18～19日 | 都岳連アイスクライミング講習会 | 高須 |
| 2月26日 | 不動岩ゲレンデ（神戸） | 高須、他 |

【 3月】

- | | | |
|----------|------------|---------|
| 3月 2日 | ハツ岳・赤岳主稜 | L 古山、今井 |
| 3月19～20日 | 越後・金城山北尾根 | L M頭、T |
| 3月19～21日 | 爺ヶ岳・北稜（敗退） | L 古山、佐藤 |
| 3月24～26日 | 南ア・塩見岳 | 今井、他数名 |
| 3月25～27日 | 爺ヶ岳・北稜（敗退） | L 古山、佐藤 |

95' 北岳冬期合宿 in ボーコンハイツ

1994. 12. 30 ~ 1995. 1. 3

パーティ L 本図一統、古山正文、高須 章、佐藤文則、馬淵勝則、
中居康展、告 広道、澤田 仁、坂本昭裕 生井一男

12月29日、土浦協同病院に21時に集合した。我々7人の侍プラス三羽鳥は、告の超デラックス仕様のランドクルーザーと本図さんのスーパーデリカに乗り込み、今回の獲物を狙うべく眼を輝かせ、不敵な笑いを込めながら一路夜叉神峠に向け、車を走らせたのであった。

夜叉神峠にいく道すがら、車の中では今回の標的である北岳、間の岳、そしてパットレス四尾根と攻略の話に余念がない。誰をとっても一癖二癖も有る猛者ばかりで、今回の合宿は、この兵隊には物足りないんじゃないかと思われてしまう程だ。

夜叉神峠にAM4:00到着。仮眠をとるために横になり、眼を閉じるとすぐ朝が来た。

朝飯をかつ込んで準備をする。今日の日程は池山小屋まで。この登りが結構つらいと思う。何しろ入山初日は体も慣れていないし、登りもキツイというのは何時もの事だが『やっぱりキツイなあ』と一人思いつつ、7人の侍プラス三羽鳥の連帯に入り、深沢の下降点までの林道を重いザックを背負い歩き出した。幾つかのトンネルを歩いて行くが、長いトンネルでは中は暗く手探りで歩くような感じで、ちょっと恐いような楽しいような気持ちだった。(道が凍っていて足をとられたりで危なかった)

そして深沢の下降点に到着。ここで前に内の会にいた増田さんにあった。始め私は分からなかったのだが、声を聞いていて何か聞き覚えが有る奴だなあと思ったらそうだった。前よりちょっと太ったのかな？ちょっと顔が違ったような気がした。ここで昔話&近況報告をちょっとしながら、下降準備&休憩をとった。

颯爽と7人の侍プラス三羽鳥は、深沢吊橋まで下降を開始した。『降りるのはいいんだけど、帰りはまたここを登るのかと思うとゾッとするなあ』と思いながら降りていく。そして沢まで降り切った所に吊橋が有り、これを皆渡りきり、林道に上がった所で一本取って休憩する。

英気を養ったので、これからの登りを頑張ろう！とまたアルキ沢橋の登り口までピピピピと歩いた。林道の歩きは、体の各部分に『これから登るぞ』いった準備運動みたいなものだ。いよいよキツイ登りの開始である。本図さんを先頭に隊列を乱すこ

となく突き進む。途中、高須さんの一寸したアクシデントがあったが、順調にそして優雅さを漂わせる姿は、もう芸術的であり、もし私がビデオカメラを手にしていたら、自称山岳報道カメラマンの血が騒いだだろう。

その優雅さを漂わせる一行は、ようやく林の中に雪面が広がる池山小屋に辿り着いた。早速設営開始。6人、4人に分かれテキパキと作業をし、テントに各々入り夕食を取り恒例の一杯。私のテントは坂本伯爵の物でこれが快適なテントであった。今宵これで眠れる幸せを感じつつ、眠りに就いた。

12月31日、寒い中、目を擦り擦りシュラフから出る。今日はいよいよボーコン沢の頭まで行き幕営になる。稜線はかなり風が有り、寒いだろう。今日の登りはいよいよキツくなるが、皆元気だ。早速に各々身仕度をして登行開始となる。樹林帯を汗にまみれながら登っていくと、森林限界を過ぎて稜線が見えてきた。稜線に出て風も強くなった。それでも我々7人の侍プラス三羽鳥は、それを楽しむかの様に突き進む。そして今日の幕営地のボーコン沢の頭に到着した。早速、幕場を検討して決める。

(何時ものように本図連隊長が、決断をする) 皆、手の早い連中なので、あっという間に4人用&6人用のテントが設営された。早速荷物を入れ、テントに入る。後は快適なテントの中で団らんのひと時。そして夕食。夕食後、明日の計画を練った。その結果、佐藤&古山は、バットレス四尾根に行くことになり、中居が北岳アタック隊に入り、私と本図さんは2日に佐藤&古山両先生のトレースを使わせて頂いて四尾根アッ



ボーコン沢の頭にて…ボーコンハイツ建設中

タックになった。要するに明日は佐藤&古山以外は、北岳アタックになった訳で、ここからなら北岳なんて目と鼻の先。なんて楽な山行なんでしょ。『明日は晴れますように！我が守護神、摩利支天よ、お願いします。』ではおやすみなさ〜い。

1月1日、快晴。私の思いが天に通じたか、はたまた私の守護神『摩利支天』のなしたのか。先ず朝食を済ませ、各々支度を整える。もうすでにバットレス四尾根隊は出発しているが、我々はのんびりしている。それでも9:30頃には北岳に向け出発した。稜線上を八本歯のコル回りまで来ると、八本歯のコルは大渋滞だった。その人混みの中、佐藤&古山両氏らしき人影を発見するが、まさかこんな所にいる訳がないと思って登っていくと、やはり彼等だった。彼等は少し行ってから4尾根にトラバースする為に、北岳へのトレースから外れ、右の方ヘルートを開拓に行ってしまった。我々は快適に登行していく。ようやく北岳直下の稜線に出ようかとした時、ここは風が著しく強く、耐風姿勢して堪える。とにかく風が強い。下降してくる人に聞くと頂上はかなり強いとの事。中には頂上直下まで行って引き返したパーティもいた。ともかく行ってみようとなり、登山を開始する。私自身は思ったより風がキツクなく感じたので、あっという間に頂上に着いた。（まあ、本図さんと山行してれば、こんな風なんかそよ風みたいだよなぁと言われそうだ）無事頂上に全員登頂。記念写真を撮り、



北岳頂上にて・・・北岳アタック隊全員集合

我が家であるボーコンハイツ2LDKのマンション（以降ボーコンの頭改め、ボーコンハイツにする。）に向け、下降開始。下降となればもうこっちのもの。脱兎の如

く降りていく。すると八本歯のコルで左のほうからラッセルしながらトレースしてくる人影を発見。ありゃりゃ？どこぞでお会いした事の有るお人じゃないですか。『そう！八本歯のコルで、今日会った人じゃあ～りませんか』『ところで四尾根までトレースは出来ましたか？』そ～です。彼等なんです。北岳四尾根にこの人ありと言われた、佐藤&古山両氏なのです。彼等の話だとトラバースして行ったのだけど、4尾根にトラバースするにはこの位置からではトラバれないようで、かなりシビアな開拓をしたと言う事だった。その苦労はどんなものだったのかは手の指の凍傷を見れば分る。ともかく彼等とここで合流し、皆でボーコンハイツに帰るべく下降していった。

ボーコンハイツに到着。今日の成果を聞く為、ダンロップテントに集まり、夕食前のひと時を一杯やりながら語り合う。我々北岳隊に比べ四尾根隊の方はかなりハードだったようだ。下部岩壁から行くトレースはあったようだが、あれではワンビバーク覚悟でなければ、到底抜けられないだろうと言う事。そうするとトレースが無い訳だから、明日の私と本図さんの四尾根アタックは止すことにして、間の岳に行くことになる。また今日の山行を見て、馬淵、澤田の調子が良くない事、そして中居と3人がテントキーパーとして残ることになった。佐藤&古山両氏は、どうも納得が行かないようで、明日また四尾根にアタックするみたいだ。本当にバイタリティのある人たちだと思ったら、結局協議の末両氏は北岳に行くことになった。そして各々のテントに分かれ、夕飯を頂く。今回はシェフ古山が腕を振るう。ペミカンを作ってきたりと、なかなかいい腕だ。私には出来ない事である。そして就寝までのひと時を歌って過ごす。我々本図公爵テント対坂本伯爵テントの対抗戦となった。なかなかの対戦であり、特に最後まで出番を引っ張った古山男爵が、一番味のある歌声だった気がした。

そしてボーコンハイツにまた静けさが戻った。

1月2日・4：30起床。今日は長い山行になりそうだ。朝食を済ませ、そして水を作り、お茶を飲み、順番に身支度をする。外はまたまた快晴である。なんて俺はお天気男なんだろう。（去年はひどかったが、過去のことは忘れよう）何のかんで、準備完了して出発したのは7：15になっていた。昨日の道を間の岳の分岐まで快適に飛ばす。8：45分岐到着。同分岐発9：00。ここから北岳山荘までトラバースして行く。北岳山荘まで30分ぐらいで着いてしまった。そのまま中白根まで登っていく。中白根到着10：00。同発10：10。思ったより順調なペースで来ている。もう間の岳は目と鼻の先。今日も快適な山行になりそうだ。ここで、私は北岳隊（佐藤&古山）と交信する。もう北岳に到着したらしい。交信中も周囲は限りなく視界が利いて本当に嬉しい。こんな景色、空気を体全身で味わえるから楽しいのだろうなあ。



間の岳頂上にて

今考えると私は、山を好きにならなければ、何をやっていただろうと思う。学生の際はルポライターにも興味が有ったし、空中都市のマチュピチュとか古代文化にも興味も有った。ともかくいろいろな所に行って、そこの人々と交流して色々な事を学び、感動する出会いをしたい。そんなことが出来たらいいなあと小心者のくせに思っていた。だからおのずとこんな山行じゃないかも知れないが、山はやっていたかも知れないと思う。そんなことを思って景色を見ながら交信を終え、皆の後を付いて登っていくと間の岳に登り着いた。

間の岳到着・11:00 思ったより早く着いた気がする。ボーコンハイツから見た間の岳は、はるか彼方のような気がして行くのやだなあと思ったが、こうして来て見るとやっぱり来て良かったと思うのは私だけじゃないと思う。ここで記念写真とか山談義とかで40分位くつろいでいた。

間の岳・11:40 発。間の岳を後に下降する。来た道を戻るのが帰りは早い。中白根に到着12:00。ここでも定時交信する。両氏とも元気一杯の返事が返ってくる。そして北岳山荘に12:40に到着する。北岳山荘で大休憩を取る。天気は最高。辺りの空気は澄んでいて本当に気持ちがいい。富士山がすごく近くに見え、なおかつ雄大で綺麗に見える。こんな景色を見たら本当に病み付きになるだろうよと、我ながら思う。そうだ！だから内の会社にもいるんだけど、私はあまり知らないけど人の話では毎週のように山に行っている社員がいるみたいで、向こうは私の事を知って

いる様だけどネ。何でも日本百名山に登っているとか言う話を聞いたことが有ります。何かにつけそんな話題で話しかけて来る人がいます。同じ山好きでも人それぞれ趣向が違ふと思うので、どんな登り方がいいとかは言いません。山登り自体が自己満足なのだから、その人が満足すればそれでいいと私は思っています。と～話を本線に戻す事にして、北岳山荘でまた山談義をし、八本歯 14:00。そしてボーコンハイツに 15:20 到着。そして今宵は、このボーコンハイツの最後の夜となりました。今回の山行を振り返ってみるととても楽しく、そして快適な山行でした。そのせいか話も弾み最後の宴も華やかなものになり、これでもかと言う位の賑やかさで盛り上がりました。それはもうお祭り騒ぎ。そんな『兵殿も夢のあと』の如く、静かに夜は更けていったのでありました。チャンチャンてね。

1月3日・今日は下山の日であります。今日も天気は良好。またまた富士山が綺麗で、ボーコンの稜線から樹林帯への下降では、富士山が目前に有り、目の前に広がる景色はまるで名作のワンシーンに登場する様な美しさを思わせるものでした。普通に下界で生活しては、こんな光景は決して見る事が出来ないし、この感動も分からないだろうと思います。ただロープウェイ等の文明の利器に頼ったのでは、この感動も半減してしまうと感じます。苦勞が有って始めて大きな喜びが有ると私は考えます。でも人間は得てして楽な方を取ってしまうと思うけどネ。こんな経験をするから今まで山を捨てる事が出来ないんだろうと思う。なんか歳のせいかな？最近講釈者



ボーコンハイツから北岳をバックに7人の侍プラス三羽鳥

ぼくなってきたなあ。

そして皆、無事にアルキ橋まで下山して来た。後は深沢の吊橋を渡って林道までの急登を登るだけだ。『アァ！これで今回の合宿も終了だ。』と安心したのがいけなかったのか、それとも何者かの陰謀か？私、高須、澤田の3名はまるで何者かに導かれるように深沢の吊橋への下降点を通過し、かなり林道を突き進んでしまった。トンネルを2つ越した辺りで、こりゃオカシイ、辺りの景色にどうも見覚えがない。どうも来すぎてしまっているようだ。でもオカシイ。と一寸彷徨いウロウロして引き返すと、かなり戻ってから吊橋を発見する。すると川向の川原から『なにやってんだよ！コノ〜バカッ！』との怒鳴り声が聞こえた。本図さんだ。佐藤もいた。かなり怒っている。無理もない。逆の立場であつたら（本図さんでなけりゃ）俺も怒鳴っていたらうけど。しげしげと罰の悪い顔をしながら、態度はミジンコ位の小ささで吊橋を渡る。なんでも一時間半は待ってくれていたと言う。他の者は先に登って行ったとの事。私は返す言葉もない。自分の失敗に呆れて物が言えない。私は後の2人を待つ事にして、本図さん達には先に登って行ってもらった。

ここで少し休憩して3人で登り出す。今回の三羽鳥はどうも我々三人だったようだ。（三羽鳥というより三馬鹿鳥だったようだ）ちなみに私は学生の時に〇〇〇三羽鳥と呼ばれていた。他の人たちより余計な行動をしてしまった我々は、ここの登りが随分ときつかった。ホロホロ足でようやく林道まで上がると、皆がそこで待っていてくれた。何でも2時間半位は待ったと言うので、本当に申し訳ない。そして夜叉神峠の車までテクテク歩く。

ここで言い訳じゃないが（どう聞いても言い訳かな？）私の行動（失敗）には何時も何かの意味が有るのである。その行動（失敗）の結果が、必ず良い方向へいくという意味が有るんですヨ。私本人には分からないけど、後で思うとそう考えざるをえないと言う事が、今までにも何度となく有りました。多分、私の守護神『摩利支天』が導いてくれているんじゃないかと思います。そう考えると今回のこの失敗も何らかの意味を持っているんじゃないかと考えながら林道を歩いていました。そして、車に乗って温泉に浸かって、一路茨城に帰ろうとした時その答えが分かりました。

何と、中央高速の渋滞が解消されていました。首都高とかもスムーズに車を飛ばして帰れました。そうです。そうなんですよ。あの2時間半の時間調整がなければ、今頃渋滞の真っ只中で、非常にイライラしたでしょう。みんなもそれを知ってか、私の力に感謝しているように見えましたネ。

これも昔の故事にも有る『人間万事塞翁が馬』でしょう。何事も考え方次第で良く

も悪くもなるんですね。

そうして今回のACC-J茨城の合宿も無事何事もなく終了したのであります。
..長らく御清聴有り難うございました..。

コースタイム

12月30日

夜叉神峠(8:11)ー降り口(9:25)ー池山尾根取り付き(11:56)ー池山小屋(16:04)

12月31日

池山小屋(8:33)ーポーコン沢の頭(13:20)

1月 1日

ポーコン沢の頭(9:54)ー北岳頂上(13:07)

1月 2日

ベース発(7:15)ー間ノ岳・分岐着(8:45~9:00)ー中白根(10:00~10:10)ー
間の岳着(11:00)ー間の岳発(11:40)ー中白根(12:00)ー北岳山荘(12:40)ー
八本歯のコル(14:00)ーポーコン沢の頭ベース(15:20)

1月 3日

ベース発(7:00)ー池山小屋(8:10~8:40)ーアルキ橋着(10:08~10:30)ー
深沢の下降点(14:30)ー夜叉神峠(15:40)ー.....土浦(21:30)

(生井 記)



心象の山・白峰三山

1994. 12. 30～1995. 1. 3

パーティ L本図一統、古山正文、生井一男、高須 章、佐藤文則、馬淵勝則、
中居康展、澤田 仁、坂本昭裕、告 広道

冬合宿南アルプスに決定！。

これを聞いたとき、内心躍り出したい気持ちでした。何でそんなに嬉しいかと言うと、長く冬の白峰三山に登るのが憧れだったからです。

北アルプスの好きな人、南アルプスが好きな人、両方ともいいと言う人と、色々な人がいると思いますが、私は何故か南アルプスに引かれました。

北アルプスは何となくトゲトゲしい感じで、死の匂いが漂っているというイメージが強く、上高地に行っても登りたいと思ったことが有りません。

何年か前に、仕事の都合で諏訪に住んでいた時、仕事で直々飯田市に行っていました。その時、中央自動車道の伊那～駒ヶ根インター間に見える白峰三山にとっても登りたいと言う気持ちをかき立てられ、ザックにパチンコで取ったチョコレートなどを詰め、オートバイで長野側より北沢峠を目指しました。南アルプス林道は一般車両は通行止めになっており、その時名も知らぬ沢を詰めて入笠山付近を歩いただけで終わりました。

次の挑戦は12月中頃でした。その頃はアイゼンも知らず、スキーウェアと少しの食料を持ってオートバイで広河原を目指しました。夜叉神峠で冬期閉鎖になっており、あきらめて夜叉神峠小屋まで登り、白峰三山をしばらく眺めていました。

その後も何度か広河原まで行き、ルートを登り始めたのはいいが、時間切れで引き返しなどを繰り返し、これじゃ何時までたっても登れないと言う事が分かり、山の本を買ってきてルートの時間、山小屋の位置などを調べ、今度は日本で第二番目に高い山に登るという事を決めました。これに賛同してくれた山登り経験がない友人二人と一泊の予定で白峰三山縦走を計画し、広河原を目指しました。しかし運悪く体調が優れない者が出て広河原で休んでいたのも、登り始めるのが午後2時頃になってしまいました。もちろん登るスピードも上がるはずもなく、途中何度も休んでいたのも八本歯のコル付近では、辺りは暗くなってしまいました。おまけに霧まで出てきて周りはどうなっているのか分からなくなっていました。

ルートも見失ってしまい、山に慣れていなかった三人は、ここで遭難しちゃうかな

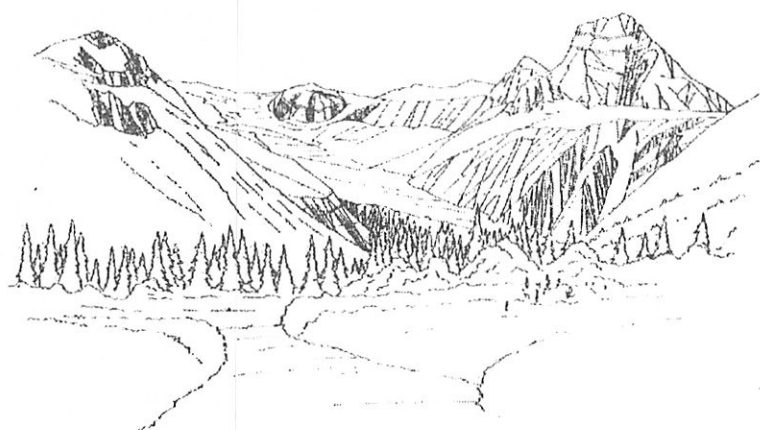
などと悲観的になっていき、おのずと誘った私は責任を感じ、あまり無闇に動くのは良くないと思い、二人を途中で待たせて置いて、なるべく高い所を目指して一人で登り出しました。何故高いところを目指したかという、大体ルートは稜線上に有ると言うことをルート図で知っていたからです。

突然、自分を呼ぶ声が聞こえました。『お〜い！明かりが見えるぞ！』ああ、天は私達を見捨てませんでした。それ迄、霧が巻いて周りがどうなっているのか分からなかったのに、どんどん霧が晴れて、何となく遠くに山小屋の明かりが見えているじゃありませんか。その明かりを頼りに山小屋に着き、山小屋の人に多少嫌みを言われながらも泊まることができました。

次の日には間ノ岳、農鳥岳に行く予定でしたが三人ともそんな気力が無く北岳だけにして南アルプスを後にしました。

大分説明が長くなりましたが、これで分かっていただけたかと思いますが、そう、私にとって白峰三山は思いで深い山なのです。今回冬合宿に行き、1日に強風の中、北岳に登り、2日に間ノ岳を目指しました。間ノ岳は北岳の時と違って風があまり無く気分よく登れました。しかしあれは良くない！『白峰三山に告ぐ！ピークのフェイントが多過ぎるぞ！あれでは何人の人が間ノ岳の頂上かと思いがっかりさせられた事か、男だったら（山が男か女か分かりませんが）堂々と勝負しろ！今度は農鳥岳まで行くつもりだから、首根っ子洗って待ってろよ！』……でもお手柔らかにお願いします。

（告 記）



豪雪の五竜岳

1995. 1. 4~6

パーティ 今井 弘 他4名

1月4日 五竜とうみスキー場のロープウェイ（テレキャビン）の始発時間8時半に合わせて、集合場所の野田市を3時半に出発した。五竜とうみスキー場に8時40分に着いた。天気は季節外れの雨、中村、宮本、鈴木、荒生、私の5名は駐車場で雨が上がるのを待った。周りを見るとスキー客も車の中で雨が上がるのを待っていた。私は今回は駄目だなと思った。

午後2時、雨が小降りになった。リーダーの中村さんがスキー場の係員にテレキャビンの上の様子を聞いてきた。『上は雪だ！出発しよう。』と中村さんが言った。テレキャビンを降りると雨が雪になっていた。スキー客が楽しそうに滑っていた。我々はスキー客の邪魔にならない様に、ゲレンデの隅をツボ足で歩いていた。午後3時半、一ノ背髪にテントを設営した。テントの中で食事と軽くアルコールを飲み、ラジオの天気予報を聞いた。明日は雪。天気予報の後のニュースで中央アルプスで雪崩が発生して6名が行方不明というニュースが流れ、無事でいることを願った。

1月5日 小雪。7時半テント撤収。歩き始めると雪は膝上で重く歩きずらく、ワカンジキをつけた。ワカンをつけると膝下位になって少しは楽になった。トップは鈴木謙造22才、続いて私37才、宮本周作52才、荒生ひさ子43才、中村元46才のオーダーで歩いた。十月に荷上げに来た時に、木に付けた赤布（シグナル）が雪に埋まり分からなくなっていた。持ってきたシノ竹に赤布を付け、雪面に差しながら歩いた。午後2時、デポ地点西遠見に着いた。西遠見まで6時間半、膝上ラッセルを鈴木君一人でトップを歩いた。彼の健脚には閉口した。余談では有るが、彼は昨年マッターホルン北壁を一人で登った人間で、今年も7月にアイガー北壁を狙っている。

西遠見の雪は腰上まであり、昨年十月来た時デポしたダケカンバの木は雪に埋まり全く分からなくなっていた。勘を頼りにスコップで二時間掘ってみる。しかし食料&燃料2日分のデポは出てこなかった。午後4時テント設営。残りの食料と燃料は今夜と明日の朝食だけである。仕方なく、明日下山することにする。明日の下山は下りが多くトレースも有るだろうから一日で五竜遠見スキー場に下山できると思いながらシュラフに入る。

1月6日 雪。テントから顔を出すと昨日と同じで灰色な空から無気味に雪が降っ

ていた。午前7時半テント撤収。ワカンを付ける。昨日のトレースは完全に消え、雪は腰から胸までであった。今日はトップを交代しながら進む。午後になって風が強くなってきた。大遠見と中遠見の間のナイフエッジに出た。風が吹くと5メートル先が見えない。そのたびに耐風姿勢をして風が止むのを待った。中遠見を過ぎ小遠見に出た。時計を見ると午後3時20分。ロープウェイ最終時間の4時には間に合いそうもないので、小遠見を下った二の背髪にテントを設営するが、風が強くてテントの設営には苦労した。午後5時。お酒も燃料も無いのと、起きていると寒いので非常食を食べ、寝るには早いがシュラフに入った。風がテントを叩く音と、五日が膝、六日が腰、明日は…等と考えるとなかなか眠れなかった。夜中何回も目が覚めた。午前4時ごろ異様な圧迫感で目が覚めた。何とテントが雪に潰され、ポールが折れてしまった。外に出て、テントの雪を下ろして、また寝た。

1月7日 予備日。空は晴れているが風が強いため目も明けられない程の地吹雪になった。食料も完全に無くなってしまった。午前8時半、テントの中で鈴木君のザックの中身を皆のザックに入れ替えて、テントの外に出、強風の中テントを丸めて鈴木君のザックに入れた。今日の雪質は気温が下がったせいかしまっていた。ワカンを付けた。二ノ背髪と一ノ背髪の間は特に風が吹くと前は見えなくなり、体は吹き飛ばされそうになる。耐風姿勢で風が止むのを待った。風が止むとまた歩き出す、の繰り返しで一ノ背髪を9時半に通過した。スキー場から聞こえる音楽でホッとした。

10時半。風切り地蔵（地蔵の頭）に着いた。名前の通りに立って歩くことも出来ない位に強い風が吹いていた。雪面はクラストしており、滑り易い。匍匐後退で下りた。10時45分テレキャビンの駅に着いた。強風の為、テレキャビンロープウェイは止まっていた。歩いて駐車場まで下りた。

帰りの車の中で私が鈴木君に『もしデポが見つかったら、どうした?』と聞いた。すると『僕は西遠見から先は行かないですよ』との返事が帰ってきた。今度は鈴木君が中村さんに同じ質問をした。中村さんは『僕なら白岳に登ってからどうするか考えるな』と答えた。『また来シーズン来よう』と中村さんが言うと、鈴木君が『もっと体力を付けます。』と言った。他の三人は下を向いて黙っていた。

(今井 記)

八ヶ岳・権現東稜

1995. 1. 15～16

パーティ L本図一統、佐藤文則、高須章

1月15日 午前6:30起床。午前7:40出発。雪のだらだら道を通って午前9:10に出合小屋に到着。

ここから少し行ったところのゴルジュを越えて取り付くのだが、その手前に別パーティのラッセル跡を発見して、その跡をたどる。急な斜面に氷がはって、その上に1m程雪がつもっている。余りに急斜面過ぎてワッパを付けて歩いても雪をガチャガチャにしてしまう。こんな急斜面で登りにくいラッセルは始めてだ。いくら歩こうとしても進まず、1m程の高さの雪の壁を作ってしまう。こういうのを畑を耕すと言うことらしい。ず〜っとこういう感じで苦労してステップを追っていくと、途中でステップがなくなっていた。仕方なく一端下へ回り込んで降り、前方にアイゼンを付けた4人パーティを発見する。

ここはワッパのほうが強いと言うので、彼らを抜いて先行することになった。こういう状態の時にはワッパ全体に垂直に力を込めて、ギュッと乗るように登る。一步一步が、フリークライミングの片足だけで立ち込む様な感じなんだが、ここでは片足だけに力を入ると雪を削り取るだけになってしまっていて熟れるまでに時間がかかる。午後3:15、少し平らなところを見つけてピバーク。ツエルトを張る。今回は軽量化の為、夏用シュラフにジフィーズの食料だ。その為だけじゃないんだろうがすごく寒い。『生きて帰れるんやろか?』と思う。太陽がなくなると人間は不安になるものようだ。昨年三ッ峠で食べたラーメンライスがすごくうまいものだったように思い出す。バーナーの火を消してしまうと一段と寒い。眠っていてもウトウトしたかと思うとすぐに目を覚ましてしまう。5分眠って、30分ふるえている感じだ。本図さんがシュラフの上から足先を揉んでくれる。やっぱり先生の手だ。

1月16日 午前4:30起床。午前6:40出発。またまたきついラッセル。もう後には戻れない。午前8:40…ナイフエッジでザイルを出す。ナイフエッジは跨いで、まるでバイクのボディをニグリップする感じで越える。ミトンも外した。後の4人パーティよりも、とにかく先に核心のバットレスの取り付けに行かないと、今まで散々ラッセルしてきた意味がない。アイゼンを付けて雪の固まった斜面を越える。午前10:30バットレスの取り付けに到着。

佐藤さんがトッポに行く。10m程登った後、30分、1時間、1、5時間……ザイルは止まったまま動かない。『どうしたんでしょう～！』と本図さんが叫ぶと、上から『自信がないんですよ～』と佐藤さんの返事が帰ってきた。

pm12:30…しびれを切らした本図さんが追っかけて登り、行きづまった所から先へ登る。

pm1:00…俺の番だ。右の手袋を外す。少し冷たいが天気も良い。最初の乗っ越しが厳しい。足のステップを決めて思い切って越える。手袋を外すのがだるいが、トッポは雪を払いながらだから手袋を付けたまま登るわけで、更に恐ろしいだろう。

ピトンの所でレスト。ピトン回収しようとして抜こうと思ったらいきなり抜けて下に落としてしまった。

次のピトンは佐藤さんが詰まった所だ。よく見るとピトンの空気中に出ている部分が随分と長い。ゆらゆらといかにも抜けそうだ。このピトンで本図さんが落ちていたらと思うとゾ～ッとする。そのピトンでセルフをとる。全く安心なんか出来ない。そこから少し登ると被ったハングだ。この時点で前腕は少しバンプ気味だ。左から……堪え切れない。右から……駄目。それじゃよし！右から登って左へ振りトラバース。左から上へ、これで登ってしまわないと、登り切る体力をなくしてしまう。どうしても上がらなければ行けない（こんなヨレヨレピトンでアプザイレンなんか出来るか！）必死になんとか越えた。

pm2:30…核心の2ピッチ終了。かなり遅い。ここからまたラッセルで、pm3:30稜線越しに権現岳のピークが見える。後2分もすれば頂上だ。でも時間が遅い為、ここを終了点として写真をとる。テルモスのコーヒーがうまい。後ろの4人パーティはまだ来ない。ここから旭岳、ツルネを越えてpm7:00出合小屋到着。一時は、今日もピバークかと思ったがここまで来れば安心だ。暗い中を軍歌『雪の進軍』を歌いながらpm8:00パーキングに着いた。今日の温泉はおあずけだ。

ps 昨年3/26権現沢右股中央稜で前にいたYCCのメンバーが一人表層雪崩に遭って死亡しています。今回はその真横のルートをとった様な物で『こういうところで死んだのか』という思いと『自分はそんなものに遭うはずがない』みたいな思い込みがだいぶありました。それだけによけい太陽が落ちた夜には寒さが恐ろしかったような気がする。日常生活にはない山の自然を対象に楽しむ限り、どうしてもつきまとう恐ろしさを、ぽかぽかの太陽の下でのクライミングが吹き飛ばしてしまうような楽しさとを今回は同時に味わうことが出来た山行でした。

(高須 記)

阿弥陀岳北稜

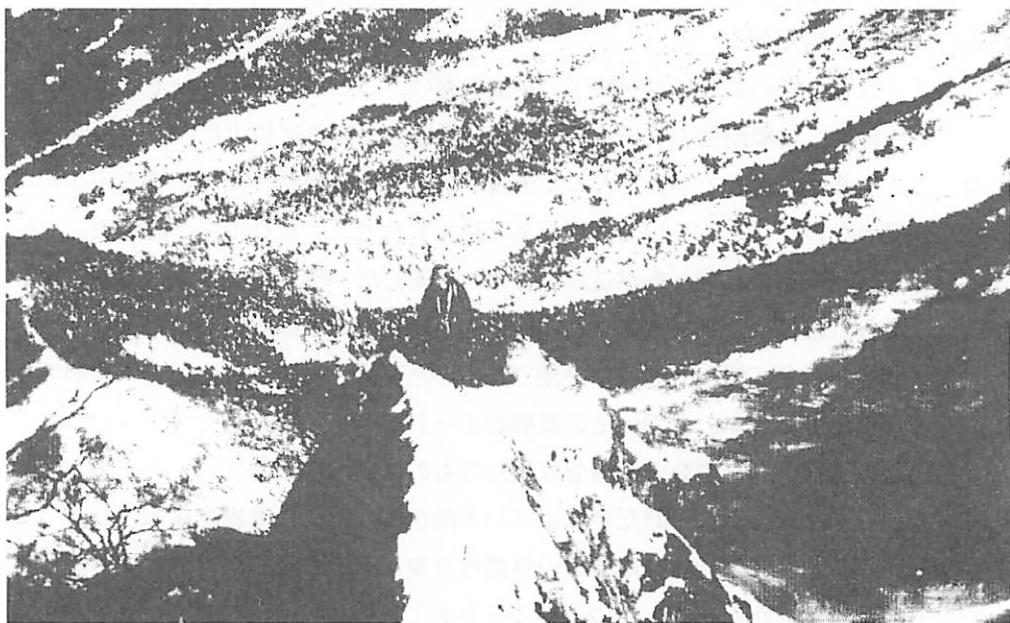
1995. 2. 11

パーティ 山本図一統、笹沢ひろみ、高須章

そのとき私は手に汗を握っていた。慎重にその手前で停車した。「凍っていないな。スタットレスも新品だし、大丈夫だろう」と一人つぶやく。車内に緊張感がみなぎる。助手席の笹沢さんの顔もいくぶん引きつって見える。再発進。一気に走り抜ける。無事通過。そう、ここは美濃戸へ向かうあの魔のカーブなのだ。ここを過ぎれば今日の登攀は成功したも同然だ。美濃戸で一杯やって仮眠。

今日の天気は雲一つない大快晴で気分も最高。登路を南沢にとり、行者小屋に向かう。昔、この南沢ルートはトレールがないことが多く、いつも北沢経由で行者小屋に行ったものだが、今はいつでもしっかりしたトレールが付いている。ここで我々はちょっとしたミスをしてしまう。道が左に急折する所に、二人パーティが道を隠すがごとく荷物を置いて休んでいたのも、左折に気がつかず直進するトレールに入ってしまう。これで30分以上のタイムロスをする。

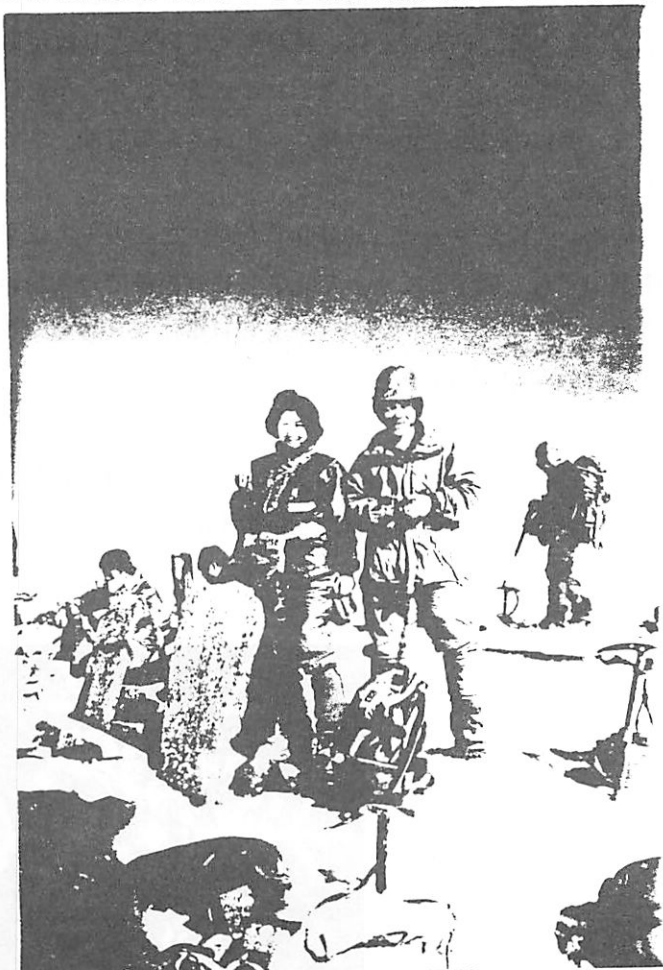
行者小屋で小休止し、アイゼンをつける。笹沢さんは冬のバリエーションルート登



阿弥陀北稜・ナイフエッジを登る笹沢

攀は初めてのはずだが、そんなに緊張している様子は見受けられない。彼女も入会した当時とくらべると、だいぶ大人になった感じがする。お母さんが亡くなったり、世間の冷たい風に当たったりと、彼女なりに苦労はしてきたであろう。それを一つひとつ克服し、クラブをやめることもなく、今こうして山に向かう姿勢を見られることは嬉しいかぎりである。高須はいろいろ話しかけてくるのだが、どうも大阪弁は分かりにくく、申し訳無いと思いつつなんべんも聞き返してしまう。それと、笹沢さんと高須の会話を脇から聞いていると、話がかみ合わないというか、この二人はよほど相性が悪いんだなと、思わず笑ってしまった。

トレールを追って北稜に取付く。傾斜がきつくなる所で安全を期してアンザイレンする。普通はさらに50m位登ってザイルを出すことが多い。高須にリードを任せるが登るのが遅い。彼は5.10とか5.11を登るのだが、それは絶対抜けないというランナーの保証のもとであり、その保証のないアルパインではアプローチですらモタモタしてしまうのだ。女性パーティや大人数パーティに追い抜かれる。こうなると黙って見ていられなくなるのが私の悪い癖で、「オーイ、俺が行くわ」となってしまふのである。高須に“ジッヘルポイントがしっかりしてるんだから、こんな易しい所でいちいちランナーをとらなくてよい”と言うと、彼は“万が一ということもあるから3m毎にランナーをとるべき”と主張する。彼の言っていることは正論である。しかし、時間がかかり過ぎて現実的ではない。いくら正論であって



阿弥陀岳頂上にて・・笹沢、高須

も現実的でなければ正しいとは言い切れないのである。俺だって悪い所では3m毎どころか1m毎にランナーをとる。(ただし、種々の条件でとれない場合もあるが)でも易しい所ではとらない。私はどちらかというと、N君やF君よりランナーはとる方である。危険地帯に長時間いれば新たなリスクに遭遇する度合いも多くなるのだ。これをいくら説明しても高須には理解してもらえなかった。スポーツクライミング指向の人には、こんなこともわからん奴がいることを認識した。俺が登れない5.11を登れる高須が、アルパインになると、俺が登れる所をなぜ高須は登れないのか、それも少し考えてみたらいかかな高須よ。

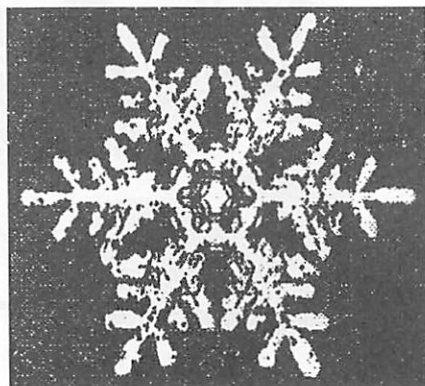
やがて頂上にて完登の握手。天気が良くて冬の厳しさなどは全然なく、冬期登攀初めての笹沢さんにとって最高のプレゼントになった。(別に私がプレゼントしたわけではないが)食事、記念撮影などをして一時を過ごす。下降は私と笹沢さんはアンザイレンをする。笹沢さんは、私が考えていたよりは足取りもしっかりしていて、バランスをくずすこともなく中岳のコルに着く。ザイルを解き、中岳沢から行者小屋に降りる。今日の凱歌に足取り軽く、笹沢さんの目は、すでに赤岳主稜登攀を夢見ているようであった。

帰路、太陽館で入浴(500円)したが、ここの主人は彫刻の収集家とみえて、すごい彫刻がずらり展示してあった。さらには高価で買えないような山岳書やヘアヌード写真集まで置いてあり、ヘアヌード写真集に見入る高須を怪訝な顔付きで見ている笹沢さんの顔が印象的であった。

コースタイム

美濃戸(6:42)－行者小屋(9:33~9:44)－北稜取付(11:31)－阿弥陀岳(13:14~13:30)
－行者小屋(14:19~14:30)－美濃戸(15:45)

(本図 記)



都岳連アイスクライミング講習会

1995. 2. 17~19

パーティ 高須章

95' 2/17...pm10時, JR上野stationで、柳井、宮坂、高田の3人と合流する。今回の3人は2/9の机上講習会で出会った奴らだ。ちょうど後ろの席にいた人の良さそうな若者に『山小屋の¥7,500-はもったいないから、よかったら一緒にテントに入りませんか?』と声をかけたら『そうしたら、僕、4人用のテントを持っているから周りの人もどうかな?』と言って集まったメンバーだ。

柳井君はタレントの中山秀征に似ていて、いつもニコニコしている。テントは彼の5人用を使うことになったので4人入っても楽勝だ。

車も柳井君のCARIBを使うことになったので、すげえラッキーな事になった。運転もほとんど彼が一人で運転してam2時に小松山荘の下の方に着いたが道が凍結していてゴムチェーンをはいてもほとんど動かない。仕方がないのでそこでテントを張ることにする。

95' 2/18...am8時小松山荘集合。一般11名、登山学校の生徒(おじん、おばんぼっかし)13名の総勢24名。

am10時、南沢の大滝に到着。アイスクライミング練習用のトップロープを張って俺達はどんぐり山の会の小野さん、雲表クラブの伊藤さんに教えてもらう。

俺は右肘を痛めていたので右手にバイル、左手にピッケルを持つ。バイルをうちこもうとするが、氷が割れていきなり顔に当たった。痛い。また打ち込むと大きくドサッと下に崩れ落ちた。でかい穴に打ち込むとようやく少しだけ突き刺さる。左手は重いから短めに持つ。ちょうど高校野球で直球投手を打つときに、バットを短めに持って鋭く振るのと同じ要領だ。(関東の人は甲子園は遠いので高校野球にはあまり関心が強くないようだが、大阪の俺達は仕事をさぼっても一日中、甲子園で野球を見ていたいぐらいだ。でも女の子と一日中居たときはさすがに少し退屈してしまった。女の子とは近くに厚生年金プールがあるので、そこで泳いでいたほうが楽しいと思う)あまりピッケルが入った感じがしなかったが、アイゼンを蹴り込んでいく。アイゼンの踵をさげて前歯と次の歯にも利かすように注意する。アイゼンもあまりめり込まないが氷の凸凹があるので凸にアイゼンの前歯を乗せる感じだ。氷の岩登りという感じだ。右のバイルを抜こうとしたが抜けない。上に下にゴシゴシこねても抜けない。バイル

の頭の部分をつかんで引き抜いた。けっこう面倒だ。右はやはり痛めているとはいえ力が強いしこうなると痛いのも忘れてしまう。右はほとんど氷の角に乗せているだけみたいな感じだ。やはり両方パイルのほうがいいのか。でもバリエーションルートならピッケルも必要だろうし、岩登りが入るとピッケル用のハーネスに付けるホルダーも2つあったほうが良いような気がする。ザックはやばい所を登るときは何時でも脱出出来るように腰のバンドを外して登るらしい。シュリングも肩からかけると動けなくなるかも知れないから首から掛けるとか、ザックの紐の部分に掛けておくらしい。(でも首からかけても首吊りにならないんだろうか)

そんなこんなでアイスクライミングと岩登りのミックスみたいな感じで、1本目を登った。

2本目は、雲表クラブの伊藤さんが苦勞して作った垂直のルートだ。伊藤さんは7年程前、アイスクライミングで失敗して首の骨を折ったらしい。

今度の氷壁は、垂直だから恐そうだが意外に今度はパイルもアイゼンもよく利く。こうなると人工的にホールドを作っている感じがすごく気持ちがいい。上部は少しハングしていて厳しい。踵を下げ気味にする。一度失敗してアイゼンを氷から外したがパイルとピッケルにぶら下がってしのいだ。

ハングの左上に木が有る。左のピッケルを打ち込みたいが疲れて何度か打ち込んでも入らない。ここで入らないまま体重を掛けることは出来ない。しょうがなく、左手を離して木を掴んで這い上がる。反則だが上まで行けると気持ちがいいものだ。小野さんによると、ここは4級を越えているということだった。

p m 4 : 30 赤岳鉱泉でテントを張る。宮坂君はシーカヤックを得意とする身長180cmを越える巨漢だ。今回は食当をお願いしたが、一人で米5合、茄子8本、ラーメン6個、マーボドーフの素2袋、サラダ油にフルーツ缶詰、コーンの缶詰まで上げてくれていた。すごく楽しい飯になった。

95' 2 / 19 .. ジョウゴ沢。昨日よりグレードはかなり低いようだ。でも、氷が透明でその下に水が流れているのが見える。これを都内で作ったら一人、¥3,000ぐらいはとられそうだ。

氷を突き抜いてしまうと水が吹き出てきそうで注意して打ち込みながら、快調に登る。そして、スクリューハーケン、スナッグ、イボイボのハーケンを打って練習した。スクリューハーケン、スナッグは良くできていてうまく入る。しかしイボイボのハーケンはすごく力がいって疲れてしまう。これはやはり敗退用に残しておく物のようだ。

p m 2 時 .. 小松山荘着。この後、伊藤さんが上からまた荷下げしてきたステーキ6

枚をみんなでご馳走になる。皆のためにこんなに振舞ってくれるとは本当に良い人だ
と思う。1時間ほど酒盛り。そして下の温泉に入って、pm5時発。pm9時上野着。

全く初対面の奴らと、ずーっと一緒だったが何の不快感も全くなかった。山登りが
好きな奴らは何でこんないい奴ばかりなんだろう。

(高須 記)

欲張り

(その1)

岩木山、八甲田、八幡平に山スキーに行った時のことである。岩木山百沢コースを下って行くと、それはそれは今まで見たこともないカタクリの群落があった。そこでビニール袋に3つほどカタクリを採った。嶽温泉で他の山菜も買い足し、八甲田に移動する。青森市内で醤油鯉節等を仕入れ、八甲田ロープウェイの駐車場にテントを張った。晚餐は山菜のおひたしをたらふく食い、ビールをグビグビ飲んだ。私はその夜、腹痛と下痢にみまわれたのである。折しもその日は月食であった。月が欠け始めてから完全に欠けるまで雪原にしゃがんでいた私であった。皆さん山菜は旨いけど調理の仕方と食べる量には注意しよう。

(M)

赤岳主稜

1995. 3. 2

パーティ L 古山正文、今井弘

正月合宿以来の久々の山行に加え、風邪気味で調子が良くないまま、協同病院駐車場に集合。今井さんのランクルで平日夜の高速を美濃戸口へ向かう。首都高速は土曜日のそれとは全く異なりスルリと通過できた。今井さんによれば平日のこの時間帯はこんなものだそうだ。美濃戸山荘の脇の駐車場にテントを張り、早々宴会となる。今井さんは持参の日本酒の一升瓶を抱えてぐいぐいとのみ始める。私はおとなしくしていた。この後、風邪薬を飲んでシュラフに潜り込む

朝起きると扁桃腺が腫れ風邪はひどくなっていた。朝食を取り薬を飲んでとりあえず行者小屋に向かう。いつもより大分時間がかかって行者小屋に着いた。無風快晴にもかかわらず寒くてヤッケを脱ぐことが出来ない。どうやら熱が出て来たようだ。それでも、登攀の準備をして出発。文三郎道を登って取り付きに向かうが、完全にスローダウンし通常の倍ぐらいの時間がかかってしまった。体調が完全に悪くなった。先が思いやられる。さてこれからどうしようか？無風快晴、順番待ち無し、今井さん絶好調、ルートは易しく良く知っている。取り付きまで来てしまった。ここで引き返すのはもったない等を熟慮の末？登ることにした。ルート自体はやはり何の問題もなく、10ピッチのつるべで終了。赤岳頂上を踏んで、文三郎道を下り美濃戸口へ向かう。ガラガラの高速に乗って、土浦へ帰る。家に帰って体温を計ったら38.5℃の熱があった。どうりで辛いわけだ。

コースタイム

美濃戸山荘(7:15)－行者小屋(9:15)－主稜取り付き(11:30)－終了点(14:50)－
行者小屋(16:10)－美濃戸山荘(17:10)

(古山 記)

越後・金城山北尾根

1995. 3. 19~20

パーティ LM頭K則、TH路

3月も下旬に入ろうとしているある日の真夜中、新潟の山村をウロウロしている、とぼけた二人がいた。一人は年配（30代?）で、もう一人は若そうである。どうもこの二人、登山口が分からないらしい。そのうち、この二人は走って来た代行車を止めた。どうやら金城山に登りたいらしい。いろいろ聞いているようだったがわからないようだ。あきらめて二人はまたウロウロしはじめた。すると偶然登山口の看板を見つけ、初めから知っていたような顔をして車を走らせて行った。自分達の登る山の登山口も調べてこないなんて登山者の風上にもおけない奴らだ。私の声が聞こえたらしく、なんやら言い訳を始めた。19日から21日の予定で、越後荒沢岳の前岨尾根に行くはずだったのに、登山計画書を郵送した小出警察署から電話があつて、現在シルバーラインが通行止めだというので急遽変更したのだという。この二人は、とぼけているわりには、ランクルとかいう今流行のRV車に乗っている。その中でビールを飲み始めた。あまりの緊張を酒でごまかそうとしているのか、バカな奴らだ。

数時間の仮眠で起きだした彼らは、ヨロヨロと心もとない足取りで歩きだした。生意気にもバリエーションルートから登るらしい。北尾根を見上げながら何やら話しているのを聞いてみよう。「Mさん、佐久の子と別れてから最近好きな女の子ができたんですよ」「ほ～、どこで知り合ったんだい」「よく行くスナックの女の子なんですよ」「うん、それで」「一度デイトして、これはうまくいくなと思っていたんですよ」「うん、それで」「ところがこの前、偶然その女らしい子が男と二人でスーパーで買い物をしているのを見ちゃったんですよ」「うん、それで」「そのあと、その子にこんな服装しているときある?って聞いたら、よく知っているわねって言うんですよ」「うん、それで」「僕、がっかりしちゃいましたよ」「スーパーで買い物するようでは彼氏だな。もしかすると一緒に住んでいるかもしれないな」「Mさんもやっぱりそう思いますか」「うん、その子だめじゃないかな」「僕もそう思ってあきらめましたよ」「それは残念だったなあ」「それがですよ、聞いてくださいよMさん。そこにいた別な子から惚れられちゃったんですよ」「お～、良かったじゃねえか」「でもその子、タイプじゃないんです」「そ～かあ、なかなかうまくいかねえなあ」「だから、もうしばらく連絡してないんです」「じゃあ今はフリーか」「ええ、でも今いくつか

種は蒔いてあるんですけどね」「ほんじゃ、一度にいくつも芽が出ちゃったら忙しいな」「そうなんですよ、ハハ・・・」「それはうらやましいわハハ・・・」だと。こいつら何話してると思ったら山の話じゃなく女の話だ。とんでもない奴もいたもんだ。山をなめてる。お！また歩きだしたようだ。

雪壁を登り出すと残置ハーケンがでてきたが、そのままノーザイルで行くようだ。ブッシュ付の岩場を左から回り込んで雪稜にでる。やつらはここで登攀用具をつけている。でもザイルをつけないで歩きだした。途中懸垂支点があったが、そのままクライムダウンで通過した。ナイフリッジを登った所でルート図を見ながら何やら言っている。「ルート図ではここを懸垂するみてえだな」「はい」「めんどくせえから真っすぐ登っちまうべ」「はい」茨城弁まるだしだ。少し行った所で小休止した。又、ルート図を見ながらなんか言っている。「左のクロワールがルートのようなだが、今日の状態では雪崩がやばいな」「そうですか」「右を登っぺ」「はい」右の雪壁を100m慎重に登り稜上にでた。すると、又立ち止まって考えているようだ。眼前の垂直の壁に登れないらしい。左、つまり水無沢側を巻きだした。そのまま雪庇の下をトラバースして行く。いままでなんとか処理してきたキノコ雪も、ここは手が出ないらしい。雪庇の弱点から強引に稜上に上がった奴らは、ヨタヨタと頂上に向かって行った。結局ザイルは出さずじまい。しばし頂上で休んだ後、寒くなったのか立ちあがった。どうやら皆沢を挟んだ対岸の尾根を降りるらしい。かなりの急斜面を降りた奴らは、7



北尾根にて・・・



雪庇の下をトラバース…T

合目の看板のあるところで歩を止めた。ビバークするらしい。時間をかけて整地し、ツェルトに入り込んだ奴らは、酒を飲みながら話し始めた。今日の天気と登攀に満足そうな若い奴は、早いピッチで飲んでいる。話の内容を聞いていると、始めはまじめに山の話をしてしたが、とどのつまりは女の話だ。「今日はなかなか快適だったなあ」「とても楽しかったですよ」「でも、はっきり言ってちょっと物足りないな」「あの雪庇の所、良く登ったですねえ」「Tは雪壁は怖いのか」「いえ、女ほどは怖くないです」「Tは女が怖いのか」「Mさんは怖くないんですか」「おめえ、もしかして古典落語の“まんじゅうが怖い”と同じこと言ってんじゃあんな」「ちがいますよMさん」「俺は女は好きだよ。でも、どれでもいいわけじゃないぜ。ちゃんと選ぶよ、俺だって。もっとも最近はある方だろうけど」「僕、この前怖い目にあったんですよ」「どこで?」「札幌のすすき野でばられたんですよ」「なにで?」「ファッションマッサージです」「なんだそれは?どんなことすんだい」「個室があって、女の子がいて、少しお話しして、それからズボンを・・・」「ほんとに～、アッハッハ」「イッヒッヒ」「ウッフッフ」「エッヘッヘ」「オッホッホ」。もう、この先は下品で報告はできない。こいつらの頭の程度がわかるというもの。なさないこと、この上ない。まもなく若い奴は酔いつぶれてしまい、飯も食えないという、ていたらく。はたしてこの二人、明日は大丈夫なのだろうか。

そのわりに二人は早く起き出した。今朝は若い奴も飯を食ったようだ。電波反射板の



金城山頂上にて…M頭

あるピークで一休みした後、一応ルートファインディングしながら、車目指してラッセルして行った。

車でラジオのスイッチを入れると、地下鉄サリン事件のニュースが飛び込んできた。二人ともビックリしてニュースに聞き入っているようだった。

時間も早いので温泉に入っていくようだ。年配のほうは五十沢温泉に行こうと言い、若い方は、ゆもと館が良いと言う。結局若い方の意見にまとまる。車で走りだしたのは良いが、反対方向に進んでいる。六日町の近くまで行って気がつくというバカさ加減には呆れる。Uターンし行ってみてビックリ、なんと二人とも同じ温泉を主張していたのだ。五十沢温泉ゆもと館というのだ。どこまでこの二人はぬけているんだろう、まったく。

途中でステーキを食べた二人は、待っている人もいなくせに、一路茨城を目指し車を暴走させていった。

私は、今後このような下品な登山者が増えないことを願っている。

以上

3月19日 車(7:01)－北尾根上(8:22~8:31)－830m地点(9:51)－1045m地点(11:42~11:54)－1240m地点(13:07~13:20)－頂上(14:17~14:36)
－ビバーク地(15:49)

3月20日 ビバーク地(7:57)－鉄塔下(8:52)－車(9:59)

(安全登山の神 記)

欲張り

(その2)

御神楽岳御神楽沢を登った時のことである。6月だったが、御神楽大滝は雪溪が切れて、すでに出ていた。ザイルを出して慎重にこれを越した。雪溪が薄い所があり恐る恐る通過する。ほっと一息ついて回りを見渡すと今まで見たこともない風景が飛び込んできた。それはゼンマイの群落だった。今からスラブの登攀があることも忘れ採りまくった。当時山菜にはまったく無知であった私は、男ゼンマイも女ゼンマイも知らず、すべてを採った。気がついた時はザックは、はちきれんばかりにパンパンに膨れ上がっていた。もう困難なルートは登れる状態ではなかった。いちばん易しそうなスラブにルートをとったがザックの重さにザイルを使わないと不安を感じるほどだった。這々の体で稜線に出た我々は空身で頂上を往復し、千鳥足で栄太郎新道を下ったのは言うまでもない。皆さん山菜を採るのはいいが、採る場所、採る量をよく考えて採ろう。

(M)

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO. 117 1995. 1 B5 52P 浦和浪漫山岳会
越後・荒沢岳前 尾根中退、荒沢山・足拍子岳、特集冬山合宿・矢木沢ダム・家の串
山・下津川山・桑の木山・十字峡、矢木沢ダム・刃物ヶ崎山ほか
- ◎Rohman NO. 118. 1995. 2 B5 38P 浦和浪漫山岳会
川内山塊・尾長沢・白山・栗ヶ岳・五百川、谷川岳、上越・茂倉岳北西尾根・武能岳西
尾根、房総・湊川相川・梨沢左俣・嵯峨山、越後・松平山・五頭山・菱ヶ岳、遭対訓練
報告ほか
- ◎Rohman NO. 119. 1995. 3 B5 24P 浦和浪漫山岳会
会津・大戸山、川内山塊・魚止山、矢筈岳、上越・クロガネの頭東尾根ほか
- ◎月報・ZAC NO. 159 1994. 10. 11 B5 8P グループ・ゼフィルス
吾妻・天元台スキー場・グランデコススキー場ほか
- ◎月報・ZAC NO. 160 1995. 1 B5 8P グループ・ゼフィルス
吾妻・高湯・五色沼・前大巔・鎌沼・五色沼・高湯、後生掛温泉・焼山ほか
- ◎月報・ZAC NO. 161 1995. 2 B5 8P グループ・ゼフィルス
南会津・大中子山、頸城・大渚山ほか
- ◎月報・ZAC NO. 162 1995. 3 B5 16P グループ・ゼフィルス
南会津・古町丸山、東北・焼石岳、葉山、鎌房山、箕輪山・鉄山・奥岳スキー場、丹沢・
松洞丸・大室山、下越・二王子岳ほか
- ◎わらじ NO. 466 1995. 1 B5 18P わらじの仲間
サブ合宿について、総会資料ほか
- ◎わらじ NO. 467 1995. 2 B5 34P わらじの仲間
剣岳冬山合宿・小窓尾根・早月尾根、南ア・北岳・農鳥岳、千頭星山、若林氏の最近
思ったこと、ほか
- ◎わらじ NO. 468 1995. 3 B5 24P わらじの仲間
上越・足拍子岳クロガネの頭北尾根、コマノカミの北尾根右稜、南尾根、私のチベッ
ト紀行ほか
- ◎逍遙 NO. 44 1995. 1 B5 7P 逍遙溪稜会
奥多摩・南秋川小坂志川本流、丹沢・水無川新茅ノ沢、富士山ほか
- ◎逍遙 NO. 45 1995. 2 B5 11P 逍遙溪稜会
南ア・千枚岳・悪沢岳、八ヶ岳・阿弥陀岳南稜ほか
- ◎逍遙 NO. 46 1995. 3 B5 7P 逍遙溪稜会
谷川・茂倉岳、八ヶ岳・赤岳、阿弥陀岳北稜、奥武蔵・蔵山・鳥首峠ほか
- ◎山紫水明 NO. 9 1995. 1 B5 12P 山旅の会
鹿沼岩トレ、蔵王・馬見ヶ瀬川八方沢、様ノ沢ほか
- ◎山紫水明 NO. 10 1995. 2 B5 8P 山旅の会
秋田駒連峰・葛根田川ほか
- ◎通信「植村冒険館」NO. 3 1995. 3 B5 4P 植村記念財団
世界最高峰エベレスト8848m 植村直己・松浦輝夫、日本人登頂から25年ほか
- ◎うあるらーっ 1995. 1. 15 B4 2P 同人・栗と栗鼠
和田会長より釣号を賜る、白神合宿の日程、卑怯なりAKITAほか
以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

今回の16号は原稿が少なかったと思います。山行も少なかったから仕方ないかな～と思うけどね。（編集長の職務怠慢かな？もっとピシピシッと書かせなくちゃいけないのかな～？）そんなこんなで、思いついたのですが……………。

次回号より、これは編集長の独断の意見なんですが、例えば“〇〇氏の山談義 “言いたい放題” とかの枠を設けてリレー形式で、次々へとバトンタッチして行くのもおもしろいかな～ぁと思います。枠は2ページ位でいいでしょう。

ACC-J東京、OB会員とか、ACC-J会員同士の和が大きくなるようなコーナーを作ってみたいと考えております。

また私も何かと忙しくなってきましたので、今度から厳しく原稿依頼をしたいと思います。まずは、罰則の設定をします。原稿の締切りは2週間とし遅れた場合は次回の原稿依頼及び、収集の仕事を次の違反者が出るまで担当してもらいます。

（例外は認めません）

皆の文集です。皆の血と汗と涙の結晶の文集です。より良いものにレベルアップしていこうではあ～りませんか。

（編集長）

季報[R&V] 第16号 発行1995年 冬号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-006茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷
